

## 後旅詞記

### ～台湾編～

9月21日から24日まで台湾へ出張した。今年度の国際交流展【美と技と祈り】で展示する台湾資料借用のためである。

行き先はもちろん新北市立十三行博物館（写真1）。

当館と十三行博物館は、2013年12月23日に学術文化交流協定を締結しており、国際交流展もその一環である（写真2）。

初めて見る十三行博物館は、台湾三大河川である淡水河（ダンシュイホー）河口の南に所在しており、空の青さと相まって、美しいコントラストを作りあげていた。

十三行博物館は、台湾の国立公園に指定されている十三行遺跡の保存に際して開館した考古博物館で、2003年に開館した比較的新しい博物館である。

当館も国指定特別史跡である西都原古墳群の中にあり、同じ考古博物館であることもあって、非常に親近感が湧いたことを覚えている。

十三行遺跡は今から約1800年～500年前までの鉄器時代の遺跡である。遺跡の集団は、周辺地域との様々な交流の中で文化を醸成し、製鉄技術を得、高い技術を持っていたことが分かっている（写真3・4）。

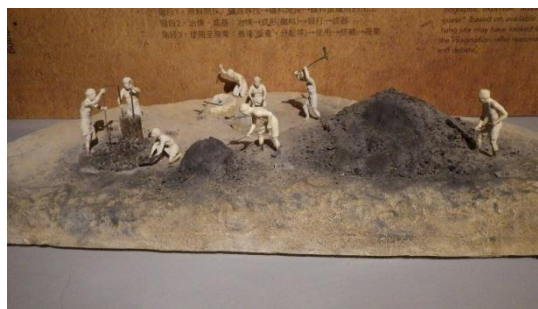
また、博物館は、教育普及にも力を注いでいるため、熱を帯びた職員の説明を食い入るように聞いていた子供達がとても印象的だった（写真5）。



1 台湾新北市立十三行博物館



2 応接室には見慣れた埴輪船が



3 十三行遺跡は製鉄遺跡でもある



4 博物館のロゴマークになった人面土器

初日の税関検査が終了し、午後、学芸員の方に十三行博物館近くの遺跡を案内していただいた。

行った先は大坵坑（ターペンケン）遺跡。台湾では略してTPK遺跡と呼んでいる。TPK遺跡は、約7000年前から4700年前の遺跡で、台湾の新石器時代を代表する十三行前史の標識遺跡である。

南国の植物が生い茂る道を進むと、大きくひらけた丘陵地帯が見えた（写真6）。

そこは予想に反して近代の墓域となっており、台湾風、日本風、様々な墓が渾然一体となって座していた（写真7）。

「多くの墓により遺跡が壊されているが、現状を維持できているのもそのおかげかもしれない。」学芸員の方の言葉に思うところがあった（写真8）。

道中、学芸員の方のベストフレンドだという「シャオヘイ」という犬に出会った。黒犬で、昔から台湾にいる犬種らしく、とても愛くるしい。

TPK遺跡にたどり着くまでは麓からかなり歩く必要があった。南国の猛暑の中、先へ先へと進む職員の方・・・休日は専ら自宅警備員に専念している私は、気持ちが折れそうになっていたところ、遅れているとシャオヘイが足を咬んでくるのである。

咬まれたくなければ進むしかない。そう思いなんとかTPK遺跡に到着できたのである。

様々な人（犬含む）達に助けられた台湾出張となった。

（沖野 誠）



5 熱心に説明を聞く子供たち



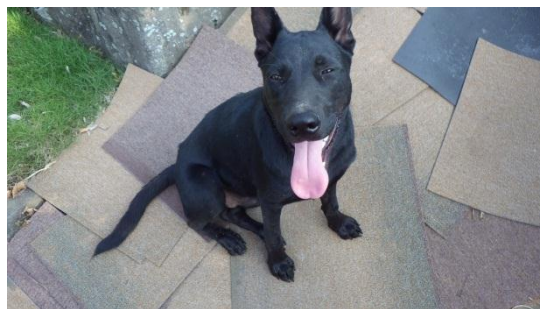
6 生い茂る南国の草木の先には・・・



7 TPK遺跡の現状



8 地表には多くの遺物が落ちている



9 TPK遺跡の道先案内犬「シャオヘイ」